第３章　富士市の歴史文化の特徴

本市では、北に富士山、南に駿河湾、東部に浮島ヶ原、西部に富士川という、それぞれに特徴ある自然的・地理的環境に囲まれた立地に大きく影響を受けながら、特色ある歴史文化が育まれ、前章でとりあげたように、数多くの文化財が現在まで受け継がれてきました。

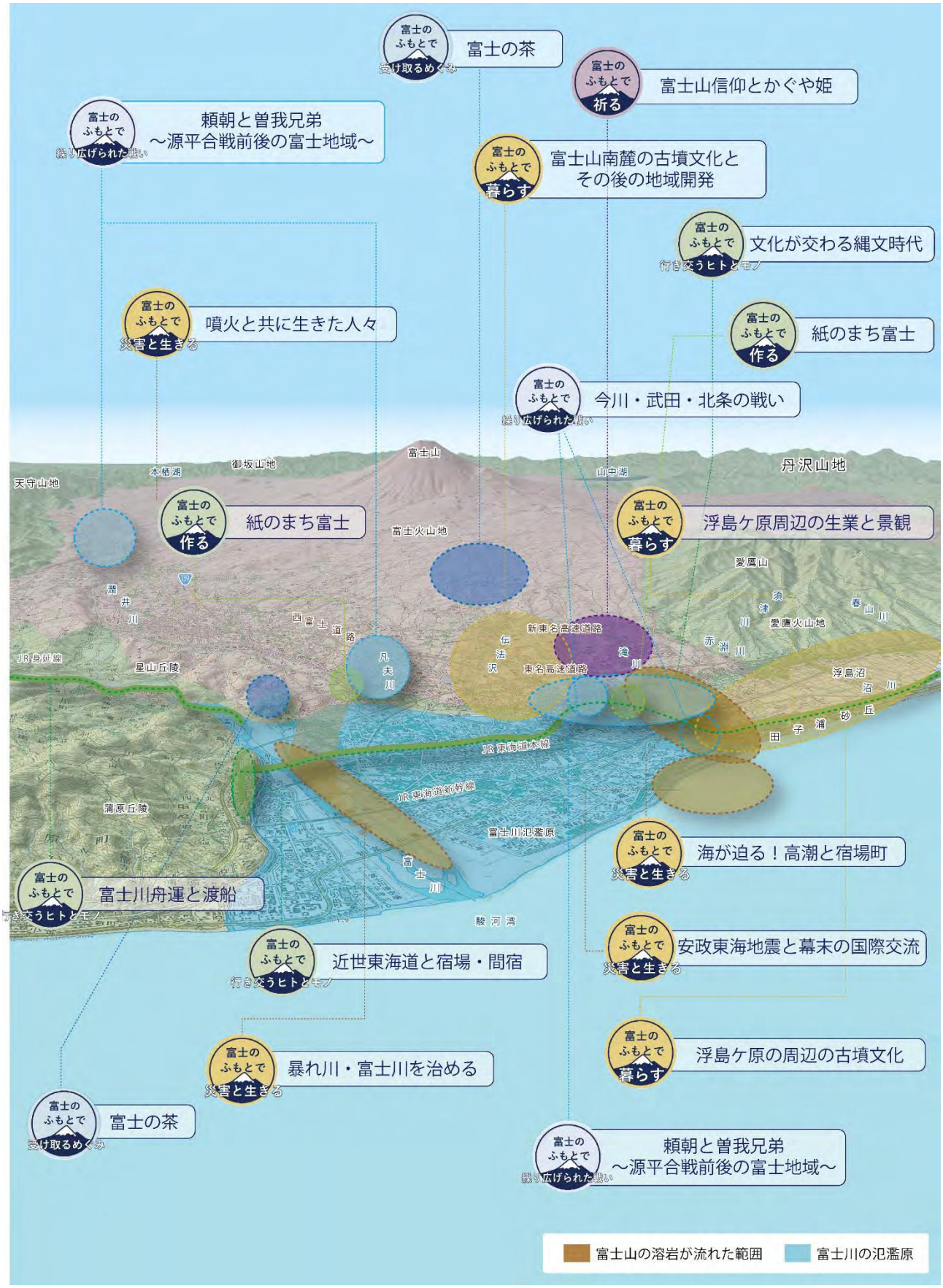
その歴史や文化の特徴は、「富士のふもとで」という言葉をいだく、以下の７つの視点からまとめることができます。

さらにその７つの歴史文化の特徴からそれらに基づく個別のテーマを設定することができます。

［本市の歴史文化の特徴］

番号	歴史文化の特徴	歴史文化の特徴に基づくストーリー
1	**富士のふもとで「暮らす」**	・浮島ヶ原周辺の古墳文化 ・浮島ヶ原周辺の生業と景観 ・富士山南麓の古墳文化とその後の地域開発
2	**富士のふもとで「繰り広げられた戦い」**	・頼朝と曽我兄弟～源平合戦前後の富士地域 ・今川・武田・北条の戦い
3	**富士のふもとで「行き交うヒトとモノ」**	・文化が交わる縄文時代 ・近世東海道と宿場・間宿 ・富士川舟運と渡船
4	**富士のふもとで「災害と生きる」**	・噴火とともに生きた人々 ・安政東海地震と幕末の国際交流 ・暴れ川・富士川を治める ・海が迫る！高潮と宿場町
5	**富士のふもとで「作る」**	・紙のまち富士
6	**富士のふもとで「祈る」**	・富士山信仰とかぐや姫
7	**富士のふもとで「受け取るめぐみ」**	・富士の茶

［歴史文化の特徴の特徴に基づくテーマ］



国土地理院発行の数値地図 50M メッシュ（標高）および数値地図 50000（地図画像）を用い、
カシミール３Ｄを使用して作成

1. 富士のふもとで「暮らす」

本市においては、約３万３千年前から人々が暮らしを営んできたことが、発掘調査により明らかとなっています。その暮らしの舞台となったのは、富士山のふもとの地であり、人々がその時々に有していた技術を用いて、周辺の環境を利用してきた結果、下記のような特徴を有する地域が生まれています。

●浮島ヶ原周辺の古墳文化

本市の東部、かつて浮島沼と呼ばれた広大な沼が広がっていた地域（現在の浮島ヶ原）の周辺では、４世紀後半から末にかけて、東海地方最大級の前方後方墳である浅間古墳（国指定史跡）や、豊富な副葬品（市指定有形文化財）を有する前方後円墳である東坂古墳が築かれています。さらに、浮島沼の西端に位置する沖田遺跡からは、古代の船を転用した棺が発見されていることなどから、古墳時代前期には、浮島沼を中心とした地域を舞台に、様々なレベルの首長や有力者のもとで、人々が活発に活動していた姿を知ることができます。

さらに、６世紀後半から７世紀後半にかけて、浮島沼周辺、特に愛鷹山の裾野に小規模な古墳が密集して数多く築かれるようになります（群集墳）。隣接する沼津市西部の地域まで範囲を広げると、その規模は日本有数のものとなり、浮島沼周辺を開発した人々による豊かな古墳文化が開いた地といえます。

●浮島ヶ原周辺の生業と景観

古墳時代に浮島沼周辺を開発した人々の主要な生業は、愛鷹山における馬の生産や愛鷹山の資源を利用した手工業、浮島沼や駿河湾での漁業、沼縁の小規模な稲作が行われていたことが、古墳から発見された豊富な副葬品や遺跡の遺物から明らかとなっています。

その状況はしばらく変化がなかったようですが、近世に入ると、これらの生業に加えて、浮島沼の干拓と新田開発の試みが盛んに行われるようになります。しかしながら、当時の土木技術では、浮島沼の完全な干拓は叶わず、ドブッタと呼ばれる、胸まで沈むような水田での稲作が昭和初期まで実施されていました。こうした過酷な環境で用いられてきた農具類は、県内でも他に例がなく、静岡県の有形民俗文化財に指定されています。

また、浮島沼の北部に位置する集落の人々は、浮島沼における稲作だけではなく、愛鷹山の裾野を利用した活動（<ruby>秣<rt>まぐさば</rt></ruby>場、木材生産等）をおこなってきました。明治時代に入ると、秣場は殖産興業の一環として茶畑となり、現在へといたっています。

結果として、この地域では、浮島沼の水田、集落、愛鷹山の茶畑、植林地といった形で、標高が高くなるにつれて生業が変化していますが、その変化の姿を現地の景観からも知ることができます。

●富士山南麓の古墳文化とその後の地域開発

浮島ヶ原周辺における群集墳の築造と同時期に、富士山の南麓に広がる火山麓扇状地である大淵扇状地上にも小規模な古墳が数多く築かれています。なかでも、伝法古墳群の中原第４号墳や東平第１号墳は、その石室の構造や副葬品（ともに市指定有形文化財）から、渡来人に由来する技術を持つ集団を率いており、武人の性格も有するリーダーが存在していたことが明らかになっています。

伝法古墳群は、奈良時代以降、駿河国富士郡の郡家が置かれたとされる東平遺跡や三日市廃寺といった集落遺跡へと引き継がれていきます。そして、この場所はその後の富士山麓開発の拠点となっていったことがこれまでの発掘調査から明らかとなっています。その背景には、こうした強力なリーダーの存在があったことは言うまでもありません。

2. 富士のふもとで「繰り広げられた戦い」

中世から戦国時代にかけて、本市は平和な時代とは言えず、戦いが繰り返されてきた場所でした。そのなかの大きなトピックとして、源平の争い、富士の巻狩り（曽我兄弟の仇討ち）といった源頼朝に関係する出来事、今川・武田・北条の戦国大名による東駿河を巡る争乱が挙げられますが、こうした戦いに関連する史跡等が市内各所に伝えられていることも本市の歴史文化の特徴の一つといえます。

●頼朝と曽我兄弟～源平合戦前後の富士地域

治承４(1180)年に伊豆で挙兵し、西に向かって進軍した源頼朝は、当時の富士川をはさんで平氏軍と対陣します。まさに合戦が始まろうとした頃、源氏の軍勢の移動により、飛び立った水鳥の羽音を源氏の来襲と間違えた平氏軍は戦わずして敗走します。

これが世に言う「富士川の合戦」ですが、市内には、「平家越（へいけごえ）」、「呼子坂（よびこざか）」、「物見堂（ものみどう）」をはじめとして、この合戦ゆかりの場所が数多く残されています。

また、平氏を滅ぼし、征夷大将軍となった源頼朝は、幕府を開いた翌年に富士の裾野で軍事演習を兼ねた大規模な巻狩りを実施します。幕府の大軍勢が長期にわたり滞在したことで、「鵜（う）無ヶ淵（ないがふち）」、「三度蒔（さんどまき）」、「瀬古村（せこむら）」など、巻狩りの際の頼朝に関係づけられた場所が現在に伝えられています。

この巻狩りの最中に、日本三大仇討ちの一つに数えられる曽我兄弟の仇討ちという事件が起こります。曽我十郎、五郎の兄弟は、巻狩りに乗じて父の仇である有力御家人の工藤祐経を討つことに成功しますが、兄はその場で、弟は捕えられ鎌倉へ護送される途中で命を落とします。のちに、この事件を題材とした『曽我物語』が成立し、広く流布されていくことになります。

それと前後して、富士市内をはじめとして、各地に曽我兄弟にゆかりの社寺や史跡が整えられていったと考えられます。

さらに、『曽我物語』をベースとした浄瑠璃や歌舞伎などの芸能、いわゆる「曽我物」が生み出され、江戸時代には歌舞伎の世界で曽我物が人気を博します。その結果、現在のアニメの聖地巡礼のように、曽我兄弟ゆかりの場所に多くの旅人が訪れるようになりました。

●今川・武田・北条の戦い

応仁の乱の後、駿河国、とくに、畿内と関東とを結ぶ東海道、太平洋と甲斐・信濃など内陸部を結ぶ富士川、そして海上交通の拠点であった吉原湊（現在の田子の浦港）が存在する本市域は勢力拡大を目指す周辺の戦国大名にとって重要な場所であったことから、度重なる戦乱の舞台となりました。

市内には、戦乱に関わる史跡として、今川義元や、今川義元の教育係・軍師であり、天文 23（1554）年に締結された今川・武田・北条の三国同盟を取り仕切ったとされる太原雪斎（たいげんせっさい）ゆかりの善徳（ぜんとく）（得）寺（じ）跡、武田氏の侵攻によって焼かれたとの伝承を持つ實相寺や法蔵寺（ほうぞうじ）、武田側と今川側の激しい交戦の舞台となった北松野城（きたまつのじょう）などが存在しています。

それだけではなく、市内今泉に所在した密教寺院・東泉院には、次々と移り変わる支配者のもと、生き残りをかけて、精力的に活動していた様子を知ることができる古文書群が伝来しています。

3. 富士のふもとで「行き交うヒトとモノ」

本市は、本州の太平洋岸のほぼ中心に位置しており、東西を結ぶ陸路上に位置するとともに、市の西部を流れる富士川を介して本州の内陸部ともつながっています。さらには、本市が面する駿河湾の外には、広大な太平洋が広がっており、古くから多くの人々やモノが行き交ってきた場所といえます。その結果、特定の地域だけにしか見られない独特の文化が見られるという形ではなく、様々な地域の特色を取り入れた文化が見られるということも本市の歴史文化の特徴といえます。

●文化が交わる縄文時代

市内には数多くの縄文時代の遺跡が点在していますが、そのなかでも縄文時代中期後半の集落がもっとも多く確認されています。

集落からは、関東地方に分布の中心がある加曽利 E 式土器とともに、同時期に中部高地に分布の中心がある曽利式土器が数多く出土します。それぞれが出土する割合は、集落ごと、または時期ごとに差はありますが、ほぼ同じ割合で出土します。そのことは、関東地方や中部地方

で花開くそれぞれの縄文文化の影響を受けていたことを示しています。

また、市内の宇東川遺跡から出土した黒曜石の原産地を分析したところ、長野県霧ヶ峰産や伊豆諸島神津島産、伊豆天城産など、遠距離で産出された黒曜石が数多くみられることからも「行き交うヒト・モノ」を知ることができます。

●近世東海道と宿場・間宿

江戸と京都を結ぶ主要街道であった東海道。本市においては、東海道の宿場の一つ、吉原宿が設置されただけではなく、東の原宿（沼津市）、西の蒲原宿（静岡市）の間に、休憩施設となる間宿（柏原・本市場・岩淵）が設けられました。

多くの人々が街道を行き交う中で、柏原のうなぎ、本市場の白酒、岩淵の栗の子餅といった、旅人が舌鼓を打った名物が生み出されていた様子が、歴史資料や浮世絵などから明らかになっています。

また、街道沿いに設けられた歴史的な建造物である小休本陣常盤家住宅（国登録有形文化財）や、岩淵の一里塚（県指定史跡）や道標、常夜灯などの石造文化財が現在でも現地で確認できるほか、石造文化財の一部や街道に面した歴史的な建造物が広見公園内に移築復原されており、往時の様子を体感することができます。

●富士川舟運と渡船

東海道を旅する人々のために、富士川には東岸の岩本・西岸の岩淵の二か所の渡船場が設けられました。富士川は急流ゆえに水位が上がると舟止めとなり、旅人たちは間の宿や宿場で待機を余儀なくされました。待機中には街道周辺の見物などが行われたようで、吉原宿の北に位置した密教寺院・東泉院には見物の際の手土産としてもたらされた絵画や書跡が伝来しています。また、間宿である岩淵の小休本陣は、たびたび大名の休憩場所となったことが歴史資料等から明らかとなっています。

一方、「下げ米、上げ塩」という言葉に示されるように、富士川は駿河と甲斐を結び、生活物資を運搬する重要な物流路でもありました。岩淵には、渡船場に加えて、物資の積み降ろしをおこなう場所である河岸場が設けられており、そこから清水湊、そして江戸や関西へとつながる一大水運が開け、多くの船が往来しました。岩淵は、こうした人や物資の動きとともに、文化や情報も行き交う場所となり、大いににぎわっていた様子が歴史資料に記されています。

また、岩淵は、日蓮宗の総本山である身延山久遠寺へと至る信仰の道、身延道の起点にもなっており、富士川に並行して設置された身延道沿いには、道標や常夜灯などの石造文化財が遺されています。

4. 富士のふもとで「災害と生きる」

本市は、フィリピン海プレート、ユーラシアプレート、北アメリカプレートという、３枚のプレートが重なりあう境界付近に位置していることから、激しい地殻変動の歴史を有しています。その結果として、度重なる火山や地震に見舞われてきました。さらに、本市では、富士川の洪水や、台風や発達した低気圧によって引き起こされる駿河湾の海水面の上昇による高潮被害に悩まされてきた地域でもあります。

こうした災害に対して、人々はあきらめることなく生き続けてきたことを示す文化財が残されており、現在の私たちにとっても重要な教訓となっているということも富士市の歴史文化の特徴といえます。

●噴火とともに生きた人々

人々が目にした富士山の最後の噴火である宝永４(1707)年の噴火では、市内に大きな被害は出なかったことが歴史資料等から知ることができますが、発掘調査の成果から、古墳時代に起きた噴火の際はこの地域に噴火の噴出物が降り積もったとされ、古墳の築造をはじめとする日々の生活に大きな影響があったことがうかがえます。また、市内各所には、溶岩流によって形成される多様な地形がみられます。こうした富士山の噴火に関する科学的な知見の蓄積から、令和４(2022)年には富士山のハザードマップが改訂され、来るべき噴火に向けての備えが常に行われています。

●安政東海地震と幕末の国際交流

東海地震は、ユーラシアプレートにフィリピン海プレートが沈み込んでいる場所である南海トラフ沿いで想定されている大規模地震の一つで、駿河湾から静岡県の内陸部を想定震源域とするマグニチュード８クラスの地震です。

この場所が震源と考えられ、県内でも被害の記録が残されている地震としては、明応(めいおう)地震（マグニチュード 8.4・明応７(1498)年）や、慶長(けいちょう)地震（マグニチュード 7.9・慶長９(1605)年）、元禄(げんろく)地震（マグニチュード 8.2・元禄 19(1703)年）などがありますが、中でも、嘉永７(1854)年 11 月に起こった安政東海地震(あんせいとうかいじしん)では、本市においても家屋の崩壊や火災、富士川流域の変化等、甚大な被害が出たことを歴史資料から知ることができます。さらに、この地震では下田(しもだ)に停泊していたロシア軍艦ディアナ号は津波の為に船体を大きく損傷し、その修理のために沼津市の戸田(へだ)に向かう途中、暴風雨によって本市の宮島(みやじま)沖に漂着します。

漂着し、沈没を待つディアナ号からは、乗組員が脱出しますが、地震で大きな被害を受けていたのにも関わらず、地元の人々が決死の救助活動を行い、約500人の乗組員の命を救います。このディアナ号にまつわる史跡が静岡県東部に点在しており、それをもとに日本とロシアの友好が現在でも続いています。

●暴れ川・富士川を治める

山梨県と長野県の県境、南アルプスの鋸岳に端を発し、駿河湾に至る全長 128 kmの富士川は、傾斜の厳しい山間部を通るために流れが激しく、かつ標高差があり流速が早いことから、日本三大急流の一つに数えられています。この富士川は、本市南部の河口付近で大きな三角州を形成し、かつては幾筋にも分かれて乱流しており、大雨の度に洪水となり、流路を変えてきました。また、河口部西岸は、たびたびの氾濫で浸食されたことによる河岸段丘が形成されています。

江戸時代の初期には、50 年以上の歳月と莫大な経費をかけて、富士川の東岸に洪水を防ぐ堤防、「雁堤」が築かれ、豊かな耕作地が生み出されたものの、流域地域では、昭和初期まで、たびたび富士川の洪水や増水の被害を受けており、その記録が歴史資料や石造文化財等に遺されています。

●海が迫る！高潮と宿場町

駿河湾の一番奥まった場所に位置する吉原湊（現在の田子の浦港）周辺は、その地形特性のために、台風とそれに伴う高潮の被害がたびたび発生しています。とくに、東海道の吉原宿は、見附から元吉原宿、中吉原宿、新吉原宿と、三度の所替えがおこなわれていますが、中吉原宿から新吉原宿への移転は、延宝 8 (1680)年、この地域を襲った江戸時代最大級とされる台風による高潮によって、中吉原宿が一夜にして壊滅したことによります。その被害の様子は、『田子の古道』などの歴史資料や、発掘調査の成果等から明らかとなっています。

また、明治 32(1899)年には、吉原湊の西部を中心に高潮が河川をさかのぼって逆流し、広範囲の村々が浸水被害を受けた「田子浦海嘯」が起こっています。被害状況については、写真や文書などの歴史資料、犠牲者の霊を弔うために建立された慰霊碑等に記され、現代へと受け継がれています。

5. 富士のふもとで「作る」

●紙のまち富士

本市には豊富な水（地下水・河川）と森林資源があることから、江戸時代には手漉和紙による「駿河半紙」の生産地として知られていました。明治時代に入ると、手漉和紙の技術をベースにした機械抄和紙の生産を経て、大型抄紙機械による洋紙生産が主流となり、市内の今泉、原田、鷹岡を中心に紙のまち富士の土台が形作られていきます。

太平洋戦争中には、製紙工場は軍需工場に変わり、紙の生産力は著しく減少するものの、戦後の出版ブームの中で製紙業は復興を遂げ、富士市といえば「紙のまち」として広く知られるようになりました。さらに、田子の浦港の建設や周辺の道路交通網等の整備を経て、化学・紙

パルプ・機械・食料品などの工場が次々と進出し、総合的な工業地帯として発展を辿ります。

しかし、急速な地域開発や工業化は、田子の浦港の「ヘドロ問題」、大気汚染による「富士ぜんそく」、水質汚濁、地下水の塩水化といった公害を発生させ、本市は「公害のデパート」としても知られるようになります。

この問題に対しては、市民・企業・行政が一体となって解決に取り組んだ結果、状況は徐々に改善し、現在へと至っています。

市内には、現在稼働中の製紙工場が数多くみられるほか、製紙業の歴史に関連する史跡や建造物、関連資料が遺されていることも本市の歴史文化の特徴の一つです。

6. 富士のふもとで「祈る」

●富士山信仰とかぐや姫

噴火を繰り返すことで、現在の秀麗な姿が生み出されてきた富士山。有史以降も富士山の火山活動は収まらず、人々はそこに神仏の姿を見出していたことが様々な記録に遺されています。火山活動が沈静化した平安時代末期から鎌倉時代にかけて、神仏の近くで修行をおこなう宗教者たちが現れます。彼らは、現世に現れる富士山の神仏の姿の一つとして、かぐや姫をあてはめ、竹取物語を下敷きとした説話を、富士山の由来や伝説を記した「富士山縁起」という書物に記しています。こうした縁起書とそこに記された内容は、宗教者や、宗教者の拠点となる富士山周辺の社寺を通じて、地域へと根付いていきます。富士市では、市内今泉に所在した密教寺院・東泉院（とうせんいん）や、臨済宗中興の祖とされる白隠（はくいん）禅師が再興した市内比奈（ひな）の無量寿禅寺（むりょうじゅぜんじ）を中心として、市内各所にかぐや姫ゆかりの史跡・建造物等が伝えられています。

他に例を見ないストーリーの基礎となる歴史資料が遺されており、さらにそこに記された内容が文化財として現在まで伝えられている、そしてそれがまちづくりの様々な場面で活用されていることも、富士市の歴史文化の特徴の一つです。

7. 富士のふもとで「受け取るめぐみ」

●富士の茶

静岡県内の代表的な茶産地の一つである本市の茶業の歴史は、江戸時代初期まで遡ることができます。当時、市西部の岩本と市北部の大淵が主要な産地となっており、自家用とともに、現在の山梨や神奈川といった近隣地域に出荷されていました。江戸時代末期になると、国外への輸出が解禁され、輸出品としての茶の需要が高まり、富士市の各地で茶の生産が始まることとなります。また、明治時代には、県内外から優れた手もみ技術を持つ技術者を集めて作られたお茶が「天下一品（てんかいっぴん）」と激賞され、その製法は天下一製法（てんかいちせいほう）として全国に広まりました。その後、製茶機械の導入により、天下一製法は一時すたれてしまうものの、研究者や生産者の努力により復活し、手もみ技術として伝承されています。

富士市においてこうした茶業が定着し、市の基幹作物として重要な位置を占めている背景には、年間降水量が約 2,100mm、年間の平均気温が 15.8℃と比較的温暖であることに加え、市内の主要産地である北部と西部は富士山の火山灰土、東部は愛鷹火山の火山灰土が分布しており、茶の生育には適した土地柄であることが指摘できます。まさに、活発な火山活動によって生み出された自然環境を人々が巧みに利用してきた一例といえます。